

後期ハイデッガーの文体「思い (Gedachtes)」について

“Gedachtes”-Heidegger’s style of the language in his later years

小 野 真

キーワード 思い (Gedachtes)、思索と詩作、ヘルダーリン、聖なるもの

一、ハイデッガー全集第 81 巻 『思い』について

ハイデッガー全集第 13 巻『思索の経験から』に「思い (Gedachtes)」と題された小編群がある。これは、フランスの詩人「ルネ・シャール」のために、友誼を記念して 1970 年に発表されたものだが、一見したところ詩節のようにも見える、奇妙な文体で書かれていた。「思い」は、「時 (Zeit)」、「道 (Wege)」、「合図 (Winke)」、「在所 (Ortschaft)」、「セザンヌ (Cézanne)」、「前奏 (Vorspiel)」、「感謝 (Dank)」の六篇からなるが、例示として最後の「感謝」の全文をあげておこう。

Dank

Sichverdanken : Sichsagenlassen das Gehören in das vereignend-brauchende Ereignis.

Wie weit der Weg vor diese Ortschaft, von der aus das Denken in fügsamer Weise gegen sich selber denken kann, um so das Verhaltene seiner Armseligkeit zu retten.

Was aber arm ist, selig wahr es sein Geringes.

Dessen ungesprochenes Vermächtnis

großbehaltet’s im Gedächtnis :

Sagen die *Ἀλήθεια* als : die Lichtung :

die Entbergung der sich entziehenden Befugnis.

試みに訳してみると、次のようになるであろう。

「自分が基づけられて感謝すること :

自性化しつつ、用いる性起のうちへと帰属することを自分に言わせること。

いかに遠いのか、この在所の前へと行く道は、その在所からは、思索が、その貧しき祝福に属する控え目さを救うために、

接合的な仕方で、思索をそれ自身に反対して思索し得る。

しかし、貧しきもの、それはその軽やかな輪環を、喜ばしく守蔵する。

その軽やかな輪環の語られざる遺言を、

貧しきものは記憶において、偉大に保持する、

アレーテイア (真理) を言うこと、

明かるみ、として、

それ自身を拒絶する権能の露現」

主語と述語が整った文章による表現というよ

りも、充溢した語そのものを羅列したり、文法的な語順を無視したり、通常の論理によって事柄が表現されているようではない。しかし、単純に詩文の体裁をとっているわけではない。他方で、「性起 (Ereignis)」、「明かるみ (Lichtung)」など、ハイデッガーの思索の術語が多く用いられている。しかし、通常のハイデッガーの著作の文体でもない。この文体についてどのように考えるべきかは、この小編集が全集第 13 卷『思索の経験から』にまとめられて 1983 年に発表されたときはまだ、不明確であった。ただ、「思い」以外に、1941 年に書かれた「合図」、1947 年の「思索の経験から」という二つの小編集も同時に、この全集第 13 卷に収録されており、とりわけ「合図」はこの「思い」の文体と同じ思想に基づいて書かれたもののように思われた。その「合図」の末尾にハイデッガーは次のような説明を付加している。

「合図は、詩作ではない。それはまた、詩節や韻のうちへもたらされた「哲学」でもない。「合図」は、思索の語であるが、その思索はある部分はこの言明を必要としているが、そこにおいてそれ自身が充たされることはない。この思索は存在者において、拠り所を求めているのではない。なぜなら、それは真存在 (Seyn) を思索するからである。〈中略〉思索の言うことは、詩作の語と区別して、イメージをもたないものである。そして、イメージがあるように見えるところでは、それは詩作によって詩作されたものでもなく、ある「感覚」を直観的にしたものでもなく、むしろ、敢えてなされたが成功しなかった、イメージ喪失のための緊急補助アンカーにすぎない」(13:33)。

この言説によれば、ハイデッガーはこの「合図」において、存在者ではなく、真存在を思索するためにふさわしい言葉を試みた。「合図」

は、詩作ではなく、思索がその事柄を表現するのに必要とはするのだが、詩作よりも充溢したものであり、詩作と思索を超えている。ここでは、「合図」の文体に対して、詩作がどのような役割を果たしているかは説かれていない。しかし、詩作のイメージの力を肯定しているところから、詩作と従来の思索の語との間で、真存在の思索に—それを越え出ているが—ふさわしい言葉を探索していたように思われる。その探索の試みが、「思索の経験から」、「思い」という他の二篇とともに、1970 年まで続けられていたことが第 13 卷刊行時から推察されることであった。このようなハイデッガーの試みについては、辻村公一が『ハイデッガーの思索』(創文社)の「思い」と題された論攷で第 13 卷所収の「思い」について彼なりに翻訳し、解釈したものが現在でもほとんど唯一のものであり、外国語の二次文献も管見では知らない。この辻村の研究については後に論及する。

さて、2007 年にハイデッガー全集第 81 卷として『思い』が刊行された。上記の真存在の思索の試みのための膨大な草稿群であり、第 13 卷所収の諸編の背景となるものと考えられる。なお、この巻の紹介及びその論究は本稿が日本では初めてのものとなる。この全集第 81 卷『思い』は、四つの部分から成っている。編集後記(81:357 f.)に基づいて、これら文書の由来を提示してみる。第一部は「初期詩作—書簡類—思い」と題されており、婚約者であり彼の後の夫人となるエルフリード・ペトリに宛てられた様々な文章や初期の詩作に加えて、1945 年から 46 年に書かれたもの、及び 1972 年から 75 年にかけて書かれた「思い」と呼ばれた文章の束である。

第二部は「思索の経験から」と題された 1930 年代の終わりから 40 年代にかけて「思い」の

スタイルで書かれた草稿である。この草稿の「関連領域 (Umkreis)」(81:357) から彼はすでに1941年に18のテキストを「合図」のタイトルのもと私製本としてメスキルヒの出版社から公刊し、それは上に言及したハイデッガー全集第13巻『思索の経験から』(1983年)に「合図」として収録されたものである。また、同様に、この第二部と同じタイトルの「思索の経験から」というテキスト群を1954年にネスケ社から刊行している。これが同じく第13巻に「思索の経験から」として収録されたものである。

第三部の「思索の遺贈のための思い」と題されたテキストは、ハイデッガーが彼の妻の1973年7月3日の80歳の誕生日に渡したもので、そのあと数年の間さらに改訂された。ハイデッガーはすでに1971年にフランスの詩人であり友人であったルネ・シャールに「思い」と題して、これらの中のいくつかの草稿とほぼ重複する七つのテキストを献呈し、これが「思い」と題されて全集第13巻『思索の経験から』に収録されて出版されたものである。

第四部の『個々の小編』には1930年代後半からハイデッガーの最晩年までの個別のテキストが収録されている。

さて、上に確認したように、第81巻のテキスト群は第13巻『思索の経験から』に収録されている。「合図」(1941年)、「思索の経験から」(1947)、「思い」(1970)三編と密接な関連をもっているように思われる。とはいえ、上記の三編のすべてが、第81巻の諸編から選抜されたものではなく、また、第81巻との関連の濃淡は上記三編のそれぞれによって異なる。

第13巻所収のテキストのうち、第81巻との関連が一番深いのは「思い」であると思われる。本巻収録の「思い」は、第三部の末尾で、

独立した編集がなされており、最初に「思い 新たな、加筆された稿」(81:321)と書かれた扉頁がつけられ、次ページにハイデッガーの妻への献辞が収録されている。さらにテキストの内容としては、第13巻所収である1971年の「思い」に若干の加筆をし、さらに十三編(「住むこと (Wohnen)」、「聴くこと (Gehören)」、「一なること (Einige)」と同じタイトルを持つ三編、「死 (Tod)」、「とき (Stunde)」、「問い (Frage)」、「指示 (Weisung)」、「まだ配定が遮蔽して… (Verstellt noch der Austrag…)」、「二重襞を思索せよ (Denke die Zwiefalt)」、「マストは (Segel sind)」、「倦むことなきもの (Das Mühelose)」)のテキストが付加されている。ただ、第81巻のテキスト群は、妻エルフリーデ・ハイデッガーが1976年以降にドイツの文書庫に寄贈した手書き原稿の束であるが、どこまでが実際に、エルフリーデに献呈されたものなのかは不明確である。編集者の解題には夫人に献呈されてから「引き続いて数年の間、加筆されたもの」とあり、なかには、個別のテキストに、ハイデッガーが作成した期日を付したのものや、「フリードリッヒ・ゲオルク・ユンガーを偲び、挨拶しつつ」(81:334)という記載のある他のテキストとは異質なものが挿入されている。

また、ルネ・シャールに献呈された「思い」と重複するテキスト群に、語句や改行等にかなりの異同があるが、これらの成立時期が、ルネ・シャールに献呈されたものより前か後かは不明なので、この異同からハイデッガーの意図を正確に汲み取ることはできない。ただ、「道」、「合図」、「前奏」、「ゼザンヌ」、「時間」、「感謝」については全集第81巻第三部にそれぞれ「第三稿」と書かれたものが収録されている。また、「在所 (Ortschaft)」の試稿と思われるもの

も収録されているが、これには稿数の記載がない。これら第三稿群も、ルネ・シャルに献呈されたものへの第三稿なのか、夫人に献呈されたものの第三稿かは不明である。第 81 巻の編集の仕方からいえば、夫人に献呈されたものの第三稿であるようにも思われるが、この点も確定はできない。ただ、これら「第三稿」群とルネ・シャル版「思い」、夫人版「思い」の異同を照合することによって、変化させていた箇所を通じて少なくともハイデッガーがどのような事柄について関心を寄せていたのかを推量することはできよう。

次に、第 81 巻と関連があるのは「思索の経験から」である。しかし、同名のタイトルがついている第 81 巻の第二部「思索の経験から」に収録されているのは「放下」という題名のテキストの一部を、第 13 巻の「思索の経験から」の冒頭の詩句として用いているのみである。その他のテキストは、第 81 巻には見出すことができない。さらに、「合図」においては、編集者の解題では、この草稿の「関連領域 (Umkreis)」から選ばれているとあるが、合致するテキストを第 81 巻から見出すことはできない。テキストそのものというより、おそらく思想的な意味での「関連領域 (Umkreis)」であると思われる。

以上より、本巻は『思索の経験から』収録の三つのテキスト群の研究のためには、ある程度役立ち得るように思われる。ただ、結論としては、第 81 巻所収のテキストの校訂の後を追跡しつつ、第 13 巻と比較することによってハイデッガーの思想の変化を厳密に推論するというようなことは難しいように思われる。

二、文体としての「思い」の特質

それでは、第 81 巻の意義はどこにあるだろうか。それは、第 13 巻所収の三つのテキスト群の文体が、ハイデッガーが「思い」と名付けた特殊なスタイルをもったテキストであり、第 81 巻にはそのテキストの在り方を吟味し得る素材がたくさんあるということである。「思い」のテキストそのものについては、上記の辻村公一の論攷が、第 81 巻の刊行のはるか以前であるにもかかわらず、第 13 巻所収の「思い」のテキストから、この文体について次のように的確に分析している。

これら「思い」の文体は「一見したところ全く不可解な語の羅列のように見える」(16)²⁾。なぜなら「主語が無かったり、動詞が無かったり、二つの疑問文が異常な仕方一つに書かれていたり、一見して極めて逆説的なことが言われていたりする」(24) からである。しかし、この「全く不可解な語の羅列」こそが、辻村によれば「ハイデッガーの思索の主要な事柄を集中的に要約した彼の思索の *Recapitulation* である」(23 f.)り、また「極度に密度の高い文章になっており、言葉の極限にまで到達している」(24)。

このような「思い」の文体についての特徴は、第 81 巻でも、ハイデッガー自身も言及しており、それは辻村の解釈とほぼ一致する。その部分を訳出してみよう。

「なぜ「思い (Gedachtes)」というテキストなのか。

なぜなら、それらのテキストは、言明的命題、およそ命題を避けることを、許容するから。

なぜなら、それらのテキストは、どんな充溢し

た言葉をも超克することを、強いるから。
 なぜなら、それらのテキストは、パルメニデスが唯一の者として—彼の思索すべき事象によって規定されつつ建立した、思索に固有の用のうちへと到達させるから。
 [彼が、ト・エオン—すなわち現前するものを初めて、思い(思索されたもの)として言葉にしたとき]
 「詞章」と韻の外見的な見かけにおいては、—テキストは「詩作されたもの」のようなものから見ている—しかし、そうではない。
 通常的判断との関係においては、ヘーゲルの「瞑想的な命題」とはまったく別様に、拒絶において、命題を克服することである。
 戻る歩み (Schritt Zurück) はまだ、言い示す (Sagen) というこの道を見つけるのか否か」(81:320)。

また、第81巻の別の個所で「思い」の文体でかかれた「合図」というテキスト群についても次のようにも語っている。

「合図

それら合図は、純粹に、詩文 (Poesie) (詩文的な詩作) のどのような在り方からも切り離されたままである。しかし、またとりわけ〈教示詩〉から切り離されている。というのも、それら合図は〈教説〉を詩行のうちへもたらしたものであるのではないからだ。むしろ、それら合図は、初期の思索者の箴言に類している。(パルメニデスの言うことは、〈教示詩〉ではない)。むしろ、思索の早初 (das Frühe) に類されるが、別の真存在の歴運から (aus dem anderen Geschick des Seyns) である。〈合図〉は言葉のうちへ言われた真存在の思索である。同時に、自由な安らいにおける静けさの揺らぎとして、言葉はこ

の静められた静けさをいたわるのだ、ということに思索を致しつつ」(81:137)。

この二つのハイデッガー自身の言葉から「思い」の文体の特徴をいくつか挙げるならば、(1) 主観—客観関係に基づいた言明的命題 (A は B である) およびそれらの命題が立脚する従来の形而上学の論理学を拒絶する。(2) それゆえ、言葉による表現でありつつも、イメージ (Bild) の力を用いて、それら表現されたものよりより充溢した事柄を指示する。(3) それゆえ、「思い」は詩文のように見えるが、詩文 (Poesie) でも詩作 (Dichtung) でもない。(4) むしろ、ソクラテス以前の思索者であるパルメニデスが唯一、彼が思索すべきものとして、固有の用へと到達させることを目指す、早初の思想家の箴言に類した文体である。(5) しかし、もちろん、「思い」の文体で語られる「合図」は、ハイデッガー固有の真存在 (Seyn) の思索に基づくもので、パルメニデスに象徴される「思索の早初」に類するものでもあるが、「別の真存在の歴運」に由来するものである。(6) 「思い」の言葉は、「別の真存在の歴運」から合図される「静けさの揺らぎ」であり、「静けさをいたわる」ことを目的とする。

もう一つ、重要な事柄を付加するならば、第81巻の「ヘルダーリン」と題された一篇において、ハイデッガーはドイツの詩人ヘルダーリンの詩「詩人の使命」の一節を挙げ、次にように言っている。

「ヘルダーリン

そして、彼らが助けることを理解するために、詩人は喜んで他者に対峙する。

ヘルダーリン、詩人の使命
 1801年 59/60節

「思い」は
詩人に感謝する

思索が、詩作を
手助けしようと、
詩作のためにふるまおうと試みるように—
別の言い示しによる控え目な奉仕のうちで。

1974年夏

M. H.] (81 : 31)

この小編において、思索と「思い」は別であるが、思索は詩作を手助けしようと、「思い」は詩作に感謝することによって、それぞれ詩作と対峙しており、また、詩人（ヘルダーリン）の方は、それぞれに対応する仕方で、「思い」と「思索」に対峙していることが、ヘルダーリンの詩の一節を引用することで示唆されている。「思い」は思索の言葉そのものではない。思索は詩作の手助けを目的としている。そして、(7)「思い」は詩作に「感謝」することを目的とした文体である。

では、この思索による詩作の手助けとはどのようなものなのか。また、「思い」は詩作に「感謝する」ということはどういうことであろうか。思索と「思い」の文体はどのような関係にあるのだろうか。

三、「思い」とヘルダーリンの詩作

ハイデッガーの文体は、すでに『存在と時間』（1927）の頃より、難解であり、普通の文章ではない、と言われていた。ハイデッガーの思索の最初のブレークスルーは、アリストテレスの『形而上学』の中で、本質（ウーシア）としての存在（オン）の規定のうちに現前（パル

ーシア）という時間的規定を発見したことである。すでに存在は本質や基体（ヒュポケイメノン）ともいうべき恒常的・持続的なあり方から解釈されていたが、その背後に、瞬間的・変移的なあり方が潜んでおり、むしろここから存在概念を解釈すべきではないか、という洞察である。時間から存在を解釈することは、ソクラテス以前のギリシアにおいては配慮されていたが、プラトンとアリストテレスの頃からその忘却が始まり、それ以降の形而上学の歴史においては、ハイデッガーの言葉でいえば「頹落した（verfallen）」存在概念にもとづいた語彙で思索がなされ、またそれが語られていた。それゆえ、ハイデッガーの思索の根本目的は、従来の西洋形而上学が看過してきた次元から、すなわち、存在概念が時間性と深くかかわっているという根本経験からアリストテレス以来の存在論を再構築することである。それゆえ、この経験を忘却した存在論に基づく従来の形而上学の言葉では、ハイデッガーの思索を十分に表現できないどころか、かえって阻害することになる。すでに『存在と時間』の中で「存在者をその存在において把握する」という課題に対しては多くの場合、「語彙が欠けているだけではなく、とりわけ文法が欠けている」³⁾（SZ : 39）と言われている。

こうして、ハイデッガーの存在の思索にとっでは、それをどのように語るのか、また、そもそも語り得るのかという思索の言葉の問題は、常に彼の思索そのものと密接に関連した最重要課題になる。その前提として、存在と時間の関連の思索は、自己の存在理解を、瞬間的・変移的な時間性のうちに保ちつつ、遂行される必要がある。すなわち、日常の実存の頹落態の傾向に逆らって、本来性へ企投する実存の変容が見られねばならないのであり、それは『存在と時

間』では「死への先駆」ないし「先駆的覚悟性 (die vorlaufende Entschlossenheit)」として表現されている。ハイデッガーの思索の言葉は、時間性からの存在理解に身を保ちつつ、その場から発せられ、かつ聴く者の実存を変容させ、その場へと聴従せしめる力をもっていなければならない。『存在と時間』を中心とするハイデッガー前期ではこのような実存カテゴリーの持つ言語性は「形式的告示 (die formale Anzeige)」と言われた。対象的に把握された思索の内容を客観的に伝達するのではなく、根本経験を暗に告示しつつも内容は形式的にとどめ、聴取者が実存的に内容の形式性への探究を通じて、告示されたものへと参与するように促す。『存在と時間』はいわば、書物全体がこのような形式的告示という言語性によって、存在を時間から経験しなおす、という次元へと読者を誘う試みでもある。

ハイデッガーの根本経験の深まりとともに、それに付随する言葉の思索も変遷していく。アリストテレスの『形而上学』を端緒として、存在と時間の関係に気付いたハイデッガーは、「形而上学」の克服を目指し、「形而上学の終末 (Ende)」を説いたニーチェとの対決を試みる。「終末」は常に「始元 (Anfang)」の確定を前提とするがゆえに、ニーチェとの対決を通じて、また彼の指示に基づいて、パルメニデスをはじめとする西洋形而上学の始元としてのフォアソクラテイカーたちの思索の背後にある経験に遡行する。彼らの始元の思索経験の痕跡が、ハイデッガーが洞察を得たアリストテレスの『形而上学』での言葉であったが、アリストテレス自身は、そのことには無自覚でむしろプラトンと同じく存在を恒常的・基底的・非時間的なものとしてとらえようとした。この意味で、プラトン-アリストテレスは「第一の始元の終わり」

であり、「形而上学の始まり」となる。ニーチェのプラトン-アリストテレス批判から、それ以前のフォアソクラテイカーの存在経験へとハイデッガーは投げ渡される。

彼らの思索の言葉を手がかりに、始元の思索経験を掘り下げているハイデッガーにとって、1930年頃にヘルダーリンの語が「運命」となる⁴⁾。それ以降晩年まで、ヘルダーリンはハイデッガーの思索とは「避けて通ることのできない関係」になる⁵⁾。それは、彼にとってヘルダーリンは「将来において、神を待ち受ける詩人」だからである。裏面からいえば、現在においては、神は、既在における逃げ去りであり同時に将来における到来を示す痕跡という仕方でのみ感じることのできるものであることをヘルダーリンは詠っているといえる。

フォアソクラテイカーの始元の思索経験は、ヘルダーリンの詩作に照らし出されることによってそれが持つ時間性の深意を顕わにされる。すなわち、存在の固有性とは覆蔵性であり、それ自身を覆蔵するという仕方によって、それ自身を露現する、ということである。端的にいえば、存在それ自身は、存在者を存在せしめることにより、存在者の存在としてそれ自身を露現せしめることによって、存在それ自身は覆蔵する。一見恒常的なものに見える存在者の存在の背後に、存在それ自身の自己覆蔵の動態があり、それこそが存在者の存在を成立せしめている。存在の根本経験は、覆蔵性 (レーテー) に由来する非覆蔵性 (アレーテイア) という動態としてハイデッガーに顕わになってくる。このような存在の現成をハイデッガーは「性起 (Ereignis)」という語で表現する。あるいは、そのような人間と存在との相関の「在所 (Ortschaft)」を「明かるみ (Lichtung)」ないし「開け (Offenbarkeit)」という。その際、「存在、

ないし存在の開けは、人間を用い (brauchen)、逆に、人間は、存在の開けのうちに立つ限りにおいてのみ、人間である」⁶⁾。

このような存在の動態については、パルメデスらフォアソクラテイクは明確には語っていない。しかしハイデッガーが始元の思索の背後にこの経験を見出したのは、ヘルダーリンの詩作からの合図によるものであった。もちろん、ヘルダーリンは18世紀の詩人であり、西洋の始元であるギリシアに生きた人ではない。むしろ始元の存在経験の忘却が終末に近づくまでに進行した時点で、突如として、始元的な経験を背景とした詩作によって、合図を贈ったのである。

なぜ、ヘルダーリンはそのようなことをなしたのか。ハイデッガーによるとヘルダーリンは、「詩作—されるべきもの」である「天の火」にギリシアで直接撃たれたものである。それは「神々の到来及び、接近を規定するところのもの光と灼熱」(53:173)であり、ヘルダーリンによって「聖なるもの」と名付けられる(vgl. 53:173)。ヘルダーリンは、天の火に撃たれ、焼き滅ぼされるかもしれぬ危険に身をさらされつつも、それを詩作という形で言語化できる才があったからこそ、思索者に合図を贈り得たのである⁷⁾。思索者は神の火に撃たれたことがない。したがって、思索者のすべきことは神々について語るのではなく、ヘルダーリンの経験を真実として証明することでもない。ヘルダーリンからの合図に従って始元の存在経験を見出したという事実に基づきつつ、始元からの存在史を再構築することを通じて、われわれは、詩人の言葉を受け入れられる地盤を形成することである。詩人は、「述べられた言葉に注意し、その言葉が正しく解釈され、維持されることに想いを向けることによって、詩人の手助

けをする」(4:30)「親しき者たち (Verwandte)」すなわち、思索者を頼り、必要とする。

それゆえ、ヘルダーリンは、ギリシアの「第一の始元 (der erste Anfang)」を照らし出す「別の始元 (der andere Anfang)」であり、人間が再び始元的な存在の経験をなし得るという「希望」である。このことは、さらに、その始元的な存在経験の深奥に、神との遭遇が有り得ること、つまり存在の根本経験において初めて我々は「聖なるもの」を経験しようということを示唆している。ただし、二つの始元の「間 (Zwischen)」である現在においては、その経験は「神々の不在 (Fehl der Götter)」という仕方ではしかありえないのである。ヘルダーリンはこの事を洞察して、作品の「帰郷」において「聖なる名前が欠けているのだ」と詠う。

さて、このようなヘルダーリンの詩作から合図を受けた思索者の役割は現代においては、いかなるものになるか。それは、詩作の言葉と、従来の形而上学の思索の言葉との間に立ち、従来の言葉を用いつつも詩人の経験へと指示するように、人々に始元の存在の思索を語ることである。これは、思索者の勝手な詩作の解釈を展開することではない。むしろ、詩人の言葉から贈られてくるものへと自分自身を聴従せしめつつ、思索者の語りを聴く者をして、その贈られたものへ同じく聴従せしめる力を持つ言葉を語ることである。このことは、詩人の言葉から贈られてくるものの自性に適っている。その自性とは、「それ自身を隠そうとするものが、それ自身を隠す仕方で、自分を贈ってくる」、端的にいえば「不在という仕方で現成する」ということである。この自性に着目して、ハイデッガーは敢えて、性起の本質は「非性起 (Enteignis)」であるという。

このような存在の動態へと自分自身を聴従せ

しめる根本経験を経てはじめて、神聖なものの次元へと関わる可能性が生じる。われわれは、「非性起」において初めて、神々が不在という仕方でも自分を示していることへと指示され、そのような仕方でのみ神聖な次元に関わりうる。現在は確かに神々が不在である。しかし、「非性起」を通じてヘルダーリンの詩作を理解することによって、詩人が感じた、神々の過ぎ去りの痕跡に想いをはせることができる。現前しないまでも、神聖な次元の痕跡を感じ取ることができるということは、同時にいつか別の元初において神々がまた到来する希望でもある。ハイデッガーは言う。「ただ、ひとつの神のようなもののみがわれわれを救いうる。私は救いの唯一の可能性を次のことのうちに見出しています。すなわち、思索と詩作において、没落しつつも、神の現れかあるいは神の不在に覚悟する準備をすることに」⁸⁾。もし、われわれが存在者の背後に存在の自性をみずに、ただ、存在者をわれわれが対象として把捉し、用立てるものとしてのみ見るならば、その時は同時に聖なるものも、神聖な次元も我々にとって閉ざされることになるであろう。

四、「思い」の根本性格

こうして、思索の言葉は、詩人の言葉と日常の言葉を、存在へ聴従せしめるべく媒介する言葉となる。それゆえ、その言葉のありかたは、日常的な語を用いつつも、そこに存在の動態への指示を含意させ、存在の深奥である根源的覆蔵性をいたわり守蔵させるような力をもった言葉でなければならない。こういった、「性起」の思想を中核とした、詩作と思索の言葉の関連についての思想の大枠は、1936年頃に書かれた草稿群『哲学への寄与』で示されているが、

この頃から最晩年までにわたって、ハイデッガーは、日常的な言葉の枠組みを解体して、いわば元初的な文体を試作し続けている。1946年の『ヒューマニズム書簡』でも、形而上学は、西洋の「論理学」と「文法」の形態において、言葉の解釈を早い時代から制圧したことが指摘され、「文法からより根源的な本質接合構造のうちへと言葉を解放することは、思索と詩作において取って置かれている」(9:314)。

こうした、ハイデッガーの思索の経歴と言語観の中から創出されたものが、「思い (Gedachtes)」であると考えられる。この文体は、いわば、ギリシアの第一の始元へと極限までに遡行したときに紬ぎ出される文体であり、それは同時に、別の始元であるヘルダーリンの領域へと、ハイデッガーの—それ自体難解であるが—思索の言葉から、さらにもう一步踏み込んだとき出現する文体でもある。従って、従来の形而上学の論理学を拒絶し、(上記の(1)の要素)、ヘルダーリンの詩作の語彙のイメージの力を用いつつも(2)、それは詩作ではなく、思索の領分を厳守し(3)、パルメニデスなどの始元の思想家が箴言に託した存在の根本経験に迫るものである(4)。それゆえ、ハイデッガー固有の存在の思索の術語も用いられ(5)、非性起としての存在の自己覆蔵の「静けさ」をいたわるものである(6)。そして、それは、詩人によって合図された、神々の不在と到来の希望を語るもので、救いの希望の神聖な「感謝」の気分のうちで語られる(7)。

このような文体である「思い」の最大の特徴の一つは、思索者としてのハイデッガーが厳に慎んでいた、神々についての直接的な言及である。もちろん、思索の立場をぎりぎりまで保持したうえのことであり、「授与留保 (Vorenthalt)」という術語によくその微妙な立場が表現

されていると考えられる。この点については、稿を改めて探究する。最後に、このような「思い」の文体をよく体現した一節を挙げておきたい。

Denken-

Weg, der aussteht dunkle Not :
die Irrnisfuge der Lichtung,
vorenthaltlich eingestimmt
der fernher wartenden Gegend,
die gegnet den >>Fehl heiliger Namen<<.

思索 -

道、それは暗い窮迫を最後まで耐え抜く：
明かるみの迷いの接ぎ目、
「聖なる名前の欠乏」に対峙する
遥かから待ち続ける方域へと
授与留保の態で、気分づけられて整えられて。
(81 : 44)

注

- 1) ドイツ人研究者、ケルン大学の Dr. Markus Wirtz 氏に照会したところ、欧米でもこの巻を詳しく論じたものはまだ見当たらないとのことであった。

- 2) 辻村公一、『ハイデッガーの思索』、創文社、1991年。
3) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Niemeyer, 16. Aufl. 1986, S.39.
4) Vgl. Otto Pöggeler, *Der Denkweg Martin Heideggers*, Neske, 1963, S.218.
5) Vgl. *Antwort, Martin Heidegger im Gespräch*, hrsg. Günter Neske und Emil Kettering, Neske, 1988, S.106. 1966年に行われたいわゆるシュペーゲルインタビュー内でのハイデッガーの発言。次のハイデッガーの発言の引用も同じ。
6) Vgl. Ebd. S.23. ただし、これは1969年に行われた、ハイデッガーとリヒャルト・ヴィッサーとの対話中の発言。
7) ヘルダーリンの詩、『イスター』では、天の火の経験が次のように詠われる。「いまや来る、天の火が！…われわれは長い間探していたのだ、贈られるもの（das Schickliche）を」。
8) Vgl. *Antwort*, S.99 f.

なお、本稿における Martin Heidegger Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann からの引用については（巻数：ページ数）で表記した。

Bd.4 : *Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*, 1981.

Bd.5 : *Holzwege*, 1977.

Bd.9 : *Wegmarken*, 1976.

Bd.13 : *Aus der Erfahrung des Denkens*, 1983.

Bd.53 : *Hölderlins Hymne >>Der Ister<<*, 1984.

Bd.81 : *Gedachtes*, 2007.